

## 開放的空間「居住者交流促す」

崇城大工学部の内田貴久助教（建築設計）らは、県の「くまもとアートポリス事業」で建設された熊本市中央区の二つの県営団地の生活満足度などについて調査し、特徴的な空間が居住者の交流促進につながった可能性があるとする結果を、日本建



内田貴久助教

築学会の論文集で発表した。

同事業は、優れた建築家らに設計を依頼し、環境デザインや都市・建築文化の向上などを図ろうと、細川護熙知事時代の1988年にスタート。熊本市内には91〜95年に6公営団地が建設された。

### 内田・崇城大助教ら 生活満足度調査



上階に向かって段状になった住棟などが印象的な県営竜蛇平団地＝熊本市中央区



広い中庭が特徴の県営保田窪第一団地

対象の竜蛇平団地と保田窪第一団地は、ともに中心市街地に比較的近いなど立地条件が良く、独自の設計コンセプトによる住戸や棟の配置が見られる。2021年に、住人を対象に居住スペースや共用部分、団地内の近隣関係の満足度などをアンケート（計56世帯）とヒアリング（計11世帯）で調査した。

竜蛇平団地は大小の三角形を並べた変則的な敷地で、各戸に保田窪第一団地は広い中庭を囲むように住戸が配置され、各

開放的なテラス・庭を設け、棟が1階から上階に向かって段状になっていることなどが特徴。高齢者が住む1階住戸の庭を上階の居住者らで協力して手入れしており、「他の住戸のテラスや庭が見えるからこそ助け合う関係が生まれた」と評価した。

論文は内田助教と、アートポリスアドバイザーの末廣香織・九州大大学院教授（建築設計）が執筆。内田助教は「両団地に特徴的なオープンな空間の大部分は設計者が意図したように有効利用されておらず不満も多いが、居住者の交流などは開放的な空間特性によって生じたと思われる」と指摘。「建設から約30年経過し現状を記録したかった。公営団地の入居者が減る中、今後の活用を考えるうえで参考の一つになるのではないかと話した。」

（前田晃志）